



はいこんちょ!

教育長のつぶやき

No.69

2023. 8/28

「みんなで学校を創ろう!」の「みんなで」の意味

「みんなで学校を創ろう!」の第10回目が25日金曜日に開催された。今までの中間報告会という位置づけで行ったが、参加者は27名。WSではなかったので、こちらの予想以上の参加だった。次第に参加者が減少しつつも、ある一定の数は確保できてきたこの回だが、今回の3通あった感想の中に一通強烈なご指摘をいただいた。

「日本人としての礼節は大切にしてほしいと思います。現中学校は小学校に比べ地域を受け入れる気がないし、教師の資質も低い。新しい学校は教師の資質をあげてほしいです。絵にかいた餅にならないようにしてほしいです。なぜ初回たくさんいたみんなで学校を創ろうの会が10回目でこんなにも少ないのでしょうか。今一度考えてほしいです。」

強烈な学校批判と共に教育行政批判でもある。しかしこうした方が強い味方になってくれることを私は学校現場で育ててもらい感じてきている。ただ、残念なのは村民の意識が変わってきていないのではないかという心配だ。この話し合いは最初から「みんなで」と謳っている。「学校づくりに協力ををお願いしたい」といった趣旨の会ではない。方向が誤っているのであればそう伝えればいいし、話し合う内容が違うのであれば、それを伝えればいい。私たちが望んでいる学校づくりとは



ごく一部の人が頑張ればよいというものでもなく、教育委員会が主体になって動き、学校を創っていくというものでもない。願わくば、最初の会では教育委員会が音頭をとるが、そのあとは次第に住民が主体になって運営委員会を立ち上げみんなであだ、こうだと言いながら進めていく学校づくりを期待している。それは今かからでも十分可能な動きだ。しかし、今回のこのご意見は、学校が悪い、先生が悪い、教育委員会が悪いというニュアンスが伝わってくる。…少々残念であるが、きっと文面に現れない様々な出来事があり、こうした文面になったと推測する。

今、公民館活動でも同じ動きで地域活性化を目指している。「住民が主体に動く」事が基本なのだ。誰かに頼ったり、批判をしたり、行政頼みではない住民自治の世界だ。

今この村に必要なのは、批判や対立ではなく、“**同じ方向を向いて、共に歩いていこうとする姿勢**”だと私はとらえている、批判や対立からは何も生まれないし、力を合わせていく原動力にもならない。

村民のこの村の将来への危機感はどうだろう。1600名を切ろうとしている人口でどうやってこの小さな行政を維持していくのか。このままでは人員的にも財政的にも成り立っていないこの現実を、教育分野が何とかできればと思い、今辛抱よく取り組んでいるのだが、なかなか村民には伝わっていないもどかしさも感じている。それでも、せっかくここまで「みんなで」創ってきた会なので、今までの参加者のご苦労を無駄にしないためにも、今後も「みんなで創っていききたいな～」と願っている。